

## Dubin's LivesにおけるBernard Malamudの 失われた人生

新 田 玲 子

### 1. *Dubin's Lives*に対するMalamudの期待

*Dubin's Lives* (1979) の発表直前、MalamudはRalph Tylerとのインタビューで作品に対する多大な自信を表明し、そのことをTylerは、“*Dubin's Lives* was his attempt at bigness, at summing up what he has learned over the long haul.”<sup>1)</sup>と伝えている。1973年発表の短編集*Rembrandt's Hat*を別にすれば、*The Tenants* (1971)以来8年ぶりの大作であることから、Malamudがこの作品に意欲的であったことは容易に想像できる。しかし、Richard Lockeによって題材に対する洞察力の不十分な点が批判されたり、<sup>2)</sup> Sheldon Hershinowによって筋のメロドラマ的ひねりや登場人物の性格付けの弱さ、Fannyの使う若い世代の言葉の不適切な点が指摘されているように、<sup>3)</sup> この作品には数々の問題点がある。そこで拙論では、*Dubin's Lives*に寄せたMalamudの期待と作品の効果のずれに注目しながら、この作品の時代的特徴と限界を考察する。

### 2. 人生と伝記の一致と不一致

*Dubin's Lives*は、伝記作家William Dubinが56才の夏の終わりにD.H.Lawrenceの伝記に取りかかるところから始まり、58才の冬にそれを完成させるまでの過程を、克明に書き留めたものである。作品中の出来事はすべて主人公Dubinの意識を通して眺められ、成功した伝記作家として鋭い観察力を誇るDubinは作家の代弁者であるかのように見える。しかし、Dubinは決してすべての事態をきちんと掌握しているわけではない。

例えば、Dubinは相矛盾するふたつの思考に揺れていながら、その矛盾に気づく様子がないまま、両者を生きようとあがく。つまり、伝記作家を意識するときの彼は、“Everybody’s life is mine unlived. One writes lives he can’t live.”<sup>4)</sup>と、〈人生＝伝記〉という概念を主張し、よりよい伝記を仕上げることで人生を意味のあるものにしようと、伝記をあらゆることに優先させる。その一方で、彼には“*That he was about to create a new life would in the end shorten his own? When the work was done he was that much older.*”<sup>(12)</sup>と考えるような、伝記によって追体験される人生と実際に生きている人生とは別物だとみなす感情もあり、伝記を書くために諦めてきた楽しみを無念に思い続けている。そして、人の人生をたどることによって達成した荣誉や満足と共に、興奮に満ちた自分の人生をも手に入れたいと願い、新たな伝記の題材に自分よりも自由奔放に生きたD.H.Lawrenceを選ぶと、みずからFannyという若い女性との恋愛に飛び込んでゆく。しかし、次章で詳述するように、この作品では伝記作家として要求される生き方と自由な恋愛に要求される生き方は完全に対立するものとして扱われており、両者の接点が探求されることは決してない。従って、恋愛に情熱を注ぐ伝記作家という新しい役割から意味のある新しい生き方が生まれる可能性はなく、Dubinは〈人生＝伝記〉という概念とそれに相反する概念に揺れ動く頼りない主人公になっている。

さて、主人公の行動が、〈人生＝伝記〉とかく人生≠伝記〉という、相反する二律の葛藤を表しているにもかかわらず、Malamudは作品をく人生＝伝記〉という一律の枠組みしか持たない寓話的構成でまとめている。

ここで作品の構成を追ってみると、DubinがKittyとの比較的穏やかな結婚生活に不満を抱き、他の女性との関係を求め始めるのは、Lawrenceの伝記に取りかかった時である。貞節で善良な妻Kittyは、“Kitty happens to be easy to lie to, which makes it harder to do.”<sup>(58)</sup>と述べられるように、Dubinにとって道德的拘束を体現し、“the genteel spiritual and intellectual quality ... — vagina dentata”<sup>(19)</sup>と描かれるLawrenceの母親と重ねられる。事実、DubinがLawrenceの母の死を描く第五章の終わりには、彼自身も書齋を納屋に移し、Kittyの影響力か

ら逃れている。その後、Friedaと駆け落ちしたLawrenceが満ち足りた性生活を送る場面を描くDubinは、失敗続きだったFannyとの情事を開花させる。Dubinが“Some people are gifted in Life.”(36)と賞賛するFannyに、Friedaの姿が重ねられていることはあまりにも明白であろう。伝記を書き始めて二度目の冬になると、DubinはLawrenceの性的能力が衰えてゆく時期を扱い、これに応じるように、彼自身もFannyに会う回数が減る。そして、Lawrenceの“Sex ... was a metaphor for a flowering life.”(211)という考えを反映するかのようになり、DubinはFannyについて、“he did not always have to be with her. She was his in principle; he had somehow earned the privilege of her.”(234)と考えるようになる。また、Lawrenceは42才で性不能となるが、伝記が終わりに近づくにつれてDubinの性生活も満たされないものとなり、長く暑い不毛な夏を通してDubinは自らの迫り来る老いと死から逃れようともがく。この苦悩は、開いた墓穴に遭遇し、“I must stop running from Lawrence dying.”(323)と決心することから、死を前にしたLawrenceの心情の追体験であったことがわかる。

このように、作品の中でのDubinの行動は完全にLawrenceの伝記にそって展開し、最終章で伝記が書き上がると、DubinはにわかにはKittyへの愛情を取り戻し、妻の元へ帰り急ぐ。寓話的構成からすれば、伝記が終了した時点でDubinが元の生活に戻るのには自然な流れであるが、Marc ShechnerやIska Alterらが*Dubin's Lives*の結末を唐突と受けとめているように、<sup>5)</sup> 作品の最後に至るまでDubinはFannyに対する強い性的欲望に支配され、妻に対する思いやりよりも自分の欲求を優先させ続けるため、最後になってFannyからKittyへ欲望の対象が変わる可能性はまったくないようにみえる。

結局、作品の一律な寓話的構成は二律のあいだを揺れ動く主人公の姿を描くには不適切な構成であり、寓話的構成から生じた結末が説得力を欠いただけではない。主人公の迷いの意味も曖昧にし、人生と伝記の関係について、作家自身がDubinと同じくらい背反する二律に困惑していたのではないかと疑わせるのである。

### 3. Thoreauの禁欲的生き方とLawrenceの情熱的生き方

主人公の生き方と作品の構成の矛盾に加え、複雑な人間性が相対立する二律に分類されてしまうこともまた、作品の大きな欠陥となっている。特に中心課題にかかわる〈人生＝伝記〉と〈人生≠伝記〉の対立は、伝記作家としての生き方を支える〈人生＝伝記〉とみなす概念が、社会的責任を果たそうとする倫理的・道徳的欲求から生じ、Fannyとの情事に自らの人生を楽しもうとする〈人生≠伝記〉とみなす概念が、肉体的な快楽や安楽さを求める欲求から生じているように、精神と肉体、倫理観や道徳観と人間的感情や性的欲望、の葛藤を扱ったもので、Malamudが初期作品から何度も取り上げてきた題材である。しかし、Marc Shechnerが分析しているように、初期作品では両者の接点が模索されていたのに対し、*Dubin's Lives*が書かれる頃には、両者の対立が修復不能なほど大きくなっている。<sup>6)</sup>

たとえば、伝記を書くことに精を出すとき、Dubinは書斎に閉じこもる孤独な生活を必要とする。つまり、〈人生＝伝記〉という概念に基づいて生きれば、社会的役割を果たす精神的満足は得れても、人と交わることで感じられる喜びは諦めなくてはならないとみなされる。一方、Fannyとの情事はしばしばDubinの仕事や結婚生活の妨げとなり、家族との結びつきも破壊する。従って、〈人生≠伝記〉という概念に基づいて生きるならば、胸躍る生の実感を味わうことはできても、社会人として、夫として、父として、十分な役割が果たせないとみなされる。このように、倫理的・道徳的欲求から生じる生き方と肉体的・感情的欲求から生じる生き方とは二者択一の対立関係で捉えられているのだが、Malamudは、伝記を書くために求められる〈禁欲的生き方〉をWalden湖のほとりに蟄居したThoreauに、Fannyとの恋愛に人生の春を求める〈情熱的生き方〉を人妻Friedaとの愛に打ち込んだLawrenceにたとえ、非常に対照的なイメージを持つふたりの作家を対比させることで、ふたつの生き方の対立を強調している。

しかし、人が感じる倫理的・道徳的欲求と生理的・感情的欲求を、Thoreau

のようなく禁欲的生き方」とLawrenceのようなく情熱的生き方」という二項対立に単純化したとき、Malamudは人生の複雑な面を切り捨ててしまったのではないだろうか。というのも、Thoreauが作品を描くためにWalden湖のほとりで暮らしたとしても、まったく人との交際を絶っていたわけではないこと、彼が自然に対し深い情愛を抱き、その中で心赴くままに暮らした自由人であったこと、LawrenceとFriedaとの生活にも多くの妥協や制約があったことが、作中で言及されているにもかかわらず、また、他の人の人生を通して自分の人生を高める伝記作成と、自分自身の人生自体を生き生きとしたものにする事の両方を、Dubinに求めさせているにもかかわらず、禁欲だけでも感情だけでも生きることができない人間の複雑さを前提に、倫理的・道徳的欲求と生理的・感情的欲求が両立する生き方を、Malamudは決して模索していないからである。

〈禁欲的生き方〉と〈情熱的生き方〉という二項対立の分類は、Dubinとふたりの女性の関係を表すためにも用いられている。たとえば、DubinとKittyの関係は、Jeffrey Heltermanが“an American version of the European arranged marriage”<sup>7)</sup>であると指摘するように、取り決めに基づいた〈意志〉で運営される共同生活の面が強調され、Thoreauのようなく禁欲的生き方〉に重ねられる。一方、DubinとFannyの関係は、結婚という形式にとらわれない〈愛情〉による結びつきである点が強調され、Lawrenceのようなく情熱的生き方〉に重ねられる。そして、妻と愛人の利害が決して一致することがないように、DubinとKittyの結婚生活が象徴する〈禁欲的生き方〉と、DubinとFannyの情事が象徴する〈情熱的生き方〉もまた、和解不能とみなされる。

しかし、現代娘でフリーセックスの実践者であるはずのFannyに、Dubinは初対面で“*This was no comfortable lady despite nature's favor of an impressive body and on-the-verge-of beautiful face.*”<sup>(6)</sup>と感じている。性に対して彼より大胆であり、結婚という社会形式にこだわらないとしても、それはDubinより社会規制が緩い時代に生まれたためでしかない。Fannyは本質的にはDubinやKittyと非常に似通っており、DubinやKittyと同様の希求心や欲求不満を持ってい

る。一方、Kittyは道徳的で自制心の強い点が強調されるが、自由に庭を飛び跳ねたり、若い男性に気を引かれたりと、情熱的な側面も多分にある。ThoreauとLawrenceの場合と同様、Dubinはそれぞれの女性のこうした複雑な内面を観察しながら、寓話的対立に当てはまるKittyとFannyの一面的資質だけを見て行動する。その結果、Dubinの観察に基づく客観的評価が、寓話的理解に基づくDubinの行動の意味を支えきれず、Kittyと離婚する気がないままFannyとの情事に奔走するDubinの態度は、寓話的構成が示唆する意味以上に、どちらの女性も思いやれない彼の欠点を強調してしまう。

もっとも、親友の妻を寝取ったり、隣人の精神科医に雨の中で一方的に相談を持ちかけながら、後で彼から電話がかかってくる時には電話口に出るだけの礼儀を欠くなど、Dubinの態度は寓話的構成と関係のないところでも自己中心的である。しかも、そんなわがままな人間でしかないにもかかわらず、Dubinは、世間に対しては成功した伝記作家として、Kittyには夫として、Fannyには恋人兼代理父として、優越した態度を取り続ける。より優れた人物として人に意見するとき彼がしばしば引用する偉人の言葉は互いに矛盾することも多く、Dubinの人生は実際のところ他人の人生のつぎはぎ細工にすぎないように見える。そのため、彼の優越感は自己中心的な態度とあいまって、鼻持ちならないほど偉ぶったものという悪印象をもたらすのである。

もちろん、Mark Shechnerが“What makes *Dubin's Lives* different is that Malamud rejects the customary conservative moral—that Dubin should act his age and patch up his marriage—in favor of something more problematic and more interesting.”<sup>65</sup>と指摘しているように、Kittyを裏切ってまでFannyに走るDubinによってMalamudが表そうとしたものは、新しい時代にふさわしい、より自由な生き方だったに違いない。だが、新しい生き方のためにDubinが顧みない義務や責任を、Malamudはあまりにも軽く扱ってはいないだろうか。結婚という社会的な拘束に縛られない、より自由な関係においても、義務や責任がなくなるわけではない。安寧をもたらす結婚生活を捨てる気がないまま、それを守り育てる義務や責任から解放されることを願い、伝記を口実に妻にも愛人にも責任

を負おうとしないDubinは、単に〈無責任〉なだけであり、そんな生き方から豊かで意味のある〈自由〉な人生が達成されるはずがないことを、Malamudは承知しておいてしかるべきだったように思う。

Malamudはかつて、*The Assistant*でMorris Boberに、“I suffer for you. ...you suffer for me.”<sup>9)</sup>と、人が常に他の人に負っている責任を語らせた。それは一見古くさい道德意識のように聞こえるが、かつては非道徳的として許されなかった多くのものが許されるようになった現代でも、形を変えながら存在し続けている。その新しい形を新しい時代の自由で恵まれた環境の中で模索する代わりに、寓話的枠組みに押し込み、〈人生＝伝記〉対〈人生≠伝記〉、〈禁欲的な生き方〉対〈情熱的な生き方〉、〈古い時代の生き方〉対〈新しい時代の生き方〉、という対立関係でしか問題を扱えなかったところにMalamudの限界がある。そして、この限界故に、両者の生き方を止揚した新しい生き方が模索されないまま、安易な人生観が提示されているのである。

#### 4. シュレミールの変質

ここまでは主として*Dubin's Lives*を作品構成の面から論じ、主人公の二律背反する概念と作品の一律的な展開の矛盾、複雑な人間性を二項対立の寓話的構成で扱ったために生じた欠陥について述べてきた。こうした矛盾や欠陥は、60年代以降急速に解放的になる性生活や、個人の自由を尊重する風潮を意識したMalamudが、新たな生き方を模索した結果生じたものと推察されるが、この試みは主人公Dubinを取り巻く環境や主人公としての資質にも明らかな変化をもたらしている。

Malamudの初期の典型的な主人公は、*The Assistant*のMorris Boberのように、道徳的であるが故に、一般社会の物質主義的な価値判断において愚かな失敗者（シュレミール）とならざるをえない者たちであった。そして、彼らの道徳がしばしば生存の極限状態で試練を受けるため、国を追われ迫害に苦しめられても神の教えを守ろうとしたユダヤ人の姿に重ねられ、〈道徳者＝シュレミール＝ユダヤ人〉という図式を成立させた。これに対して、*Dubin's*

Livesでは、主人公Dubinがユダヤ人であり、ユダヤ的なモチーフもところどころに用いられてはいるものの、Robert Towersが、“Dubin's Lives ... is only peripherally concerned with Jewishness.”<sup>10)</sup>と概観しているように、ユダヤ人であることの重要性が極めて薄い。また、すでに指摘したように、Dubinは行動と選択において道徳よりも感情を優先させる傾向があり、主人公の道徳的資質も非常に疑わしい。さらに、“Wm B. Dubin, who wrote lives, and who, it said in *Newsweek*, had once received a medal from President Johnson.”(13)と紹介されるように、Dubinは世に認められた伝記作家であり、郊外にかなり大きな家を持ち、音楽家や精神分析医のような隣人と交流する知的な中産階級に属している。第二次大戦後、継続する好景気のおかげで一般的に庶民の生活が豊かになったのみならず、GI法の恩恵も加わって、1940年には16万人しかいなかった大学卒業者が1950年には50万人に増加し、<sup>11)</sup> それまでは定職に着きがたかった多くの知識人が大学教師として安定した社会的地位と経済基盤を手に入れていたことを考えれば、社会的名声と財政的ゆとりを享受するDubinの姿は、ふたつの全米図書賞を得て作家としての揺るぎない地位を勝ち得たMalamud自身の姿であると同時に、この時代のアメリカの知識人の典型的な姿を表している。しかし、新しい時代の典型的知識人として、Dubinは、それまでの主人公が社会的失敗者として、また、虐げられる者として体現していた、道徳的な愚か者、シュレミールの印象から完全に遠のいているといえる。

Dubinにおいて初期のシュレミールの主人公の特徴が薄れていることは、彼が必要とするFannyが生存に不可欠な存在というより、今ある生を一層充実したものにするための贅沢品に近いことにも関係する。初老のDubinにとってFannyに象徴される若い生命力がいかに重要であろうとも、それを無闇に焦られることは老いに対する愚かな抵抗でしかない。従って、若さを保つための過酷なダイエットやジョギングがもたらす肉体的苦痛に、Fannyを手に入れられない精神的苦悩が重ねられているとしても、自ら作り出す肉体的試練は自虐的な愚行という印象を強くし、初期のシュレミールの主人公が絶望的状况を引き受けたときの、あの雄々しさや高潔さが感じられることはない。さら



に、初期のシュレミール的主人公にとって、肉体的な苦しみに耐えることは精神的な高みに到達するための手段であったが、“He fought winter as if it were the true enemy.”(132)と描かれるDubinの場合は違う。“as if”が用いられているように、冬は決してDubinの真の敵ではない。Rita Gollinが、厳しい冬の寒さを押しての長いジョギングは老齢を防ごうとする“an element of despair”であり、伝記が書けないという事実からの“a form of escape”であると分析しているように、<sup>12)</sup> Dubinの場合、肉体的な苦しみは精神的な苦しみからの逃避となっている。

もっとも、若い恋人に熱をあげ、その苦しみをジョギングに置き換えているDubinの愚かさは、シュレミールのトレードマークである〈愚かさ〉を連想させるので、彼はやはりシュレミール的主人公だと反論されるかもしれない。しかし、シュレミールを真にシュレミールたらしめる〈愚かさ〉とは、尊厳ある人間として生きるために選んだ道が社会通念に反しているが故のものである。Dubinの場合の愚かさは、情事に対する下心を裏切られる姿とか、厳しいダイエットを敢行しながら夜こっそりとチョコレートをむさぼり食う姿とか、嫉妬に駆られてFannyの生活を覗き見するさもない姿など、常に、道徳にも常識にも反した自らの行為で招くものにすぎない。従って、愚かさにシュレミールのイメージが彷彿するとしても、初期のシュレミール的主人公が愚かさ故に勝ち得た勇気や希望がDubinの愚かさに見出されることはないのである。

## 5. 父の〈生を拡大〉する息子達から、父の〈生を繰り返す〉娘達へ

*Dubin's Lives*で新たな時代の流れを意識させる特徴として見逃せないもうひとつの点は、MalamudがRalph Tylerとのインタビューで娘Jannaから影響を受けたと認めているフェミニズムの要素である。<sup>13)</sup> Malamudのそれまでの作品では、父から生き方を継承する役割は常に息子達に与えられており、娘達は継承における触媒的な役割しか担っていなかった。しかし、*Dubin's Lives*では、ModeやFannyのような娘達の役割が前面に押し出され、彼女たちは人生

の指導者としての父を探しながら、人生と積極的に関わる。ただし、娘達は父や父とみなす男性から十分な援助を得れないまま、それぞれの模索と逡巡を経て、自力で独立してゆき、かつての息子達のような役割を演じることはない。

たとえばModelは、父親にも、父親的役割が果たせるほど年長の恋人にも相談せず、肌の色の違う子を生んで育てることをひとりで決意する。Fannyは、Dubinと別れているあいだにDubinの子を墮胎し、大学の卒業証書を手に入れ、母親の遺産を使って農場の経営に乗り出す決心をする。勿論、Dubinは、自分を大事にするようにFannyに諭したり、Modeの妊娠を知ってすぐに駆けつけるなど、父親的な役割をまったく果たしていないわけではない。しかし、Fannyが別れの手紙で、“I appreciate certain things you have done for me—some my father might have done but didn't” (276)と述べたあと、はからずも、“although with one hand you take away what the other gives.” (276)と付け加えているように、彼はFannyやModeの要求よりも自分の欲情を優先させ、父親の役を十分果たせないことが多い。

Dubinが娘達の人生の力強い導き手になれないのは、自分の性的欲求に翻弄されて自己中心的になってしまうためだけではない。もっと根本的な原因は、彼には〈継承〉に値するだけの十分な生き方がないことである。FannyがDubinに、伝記を書きたいことに気づいた方法を尋ねたとき、Dubinの答えは、“trial and error plus good luck” (221)という頼りないものでしかない。禁欲的生き方と情熱的生き方を二項対立としてしか捉えられず、両者の接点を見出せないまま右往左往するDubinであるから、この答えは当然かもしれない。しかし、作品の最後に掲げられたDubinの著作リストがDubinの人生に対する作家の肯定的評価を表していることから、Malamud自身が、人は誰でもDubinのように頼りない生き方しかできないと考えていることがわかる。

迷い、過ちを犯しつつも努力をすることは、作中でFannyとModeがすでに行っていることである。DubinにもMalamudにもそれ以上の生き方が提示できない以上、彼女たちが受け継ぐ人生は作中にはない。従って、作品の最後、Fanny

とModeがこれまでよりもしっかりした足取りで新たな人生に踏み出しているようにみえても、この出発はDubinの著作リスト同様、人生に真剣に取り組んできた彼女たちへのMalamudのエールとみなすべきであろう。Thomas L. Rohnerが、“For all his studies of other people's lives ..., Dubin's own life is still a complete mess.”<sup>14)</sup>と述べているように、初老の域に至ってもまだDubinが人生を習得できていないのであるから、MaudとFannyの未来が素直な道であろうわけがないからである。

結局、この作品では、かつての息子達が成し遂げた、父の生き方に若い世代の生き方を取り入れ、父に出来なかったすばらしい人生を実現する、〈生を拡大する〉ような継承は行われぬ。妻の連れ子のGeraldが常に人生から逃避的で、最後には、Dubinの姓を捨てて母親の姓に戻り、遠いソビエトの壁の向こうに閉じこめられているのも、かつてと違い、父の生がよりよい形で継承できない状態〉であることを象徴しているのではないだろうか。一方、娘達は新たに受け継ぐまでもなく、Dubinの良さも悪さも持ち合わせた存在である。彼女たちは積極的に生きようとはするが、Dubinよりひとつだけ若い世代として、新しい時代と場所においてDubinの〈生を繰り返す〉ことしかできないのである。

ところで、岩元巖は、たとえDubinが元の生活に戻ったように見えても、新しい人生を知ろうと努力を続けたことは彼の人生を豊かにしていると、Dubinの生き方に肯定的な解釈を下している。<sup>15)</sup> また、寺澤みずほは、「現実と関わり、女と関わり、現実に浸蝕され、分裂に苦しみながら生きるのが人間の生なのだ」<sup>16)</sup>という主張を、*Dubin's Lives*の帰結点として掲げている。Malamudの視点に立てばこれらの解釈は妥当であるが、その見解を高く評価する両氏の姿勢には同意できない。というのも、Dubinの誤りは多分に自己中心的であり、人が完全に誤りを犯さないで生きることはできないにしても、Dubinよりもましな生き方はいくらかでも可能だからである。それにもかかわらず、生きるためには迷いと過ちは逃れ得ないという安易な普遍化に転じ、過ちを減らすこと、人をできるだけ傷つけないようにすることを考慮していな

いのは、大いに非難されてしかるべきではないだろうか。

## 6. Malamudの失われた人生

*The Schlemiel as Modern Hero*でRuth R.Wisseは現代的主人公としてのシュレミールの性質を“Ours is not a hero for all seasons. By the end of the 1960s the Jewish fool began to falter.”<sup>17)</sup>と分析する。60年代の後半を境にユダヤ系作家の主人公像からシュレミールの資質が失われてゆくのは、Malamud一人に限られる現象ではない。不可能に見えても努力し続けるしかない不条理な状況が日常茶飯であった世界恐慌や世界大戦期から、限界を認めてもなお人間らしく生きる余裕をもたらした戦後の繁栄期への時代の変化が、新たな主人公を要求していたのである。

*Dubin's Lives*がそういう要求を強く意識していることは、豊かな物質生活を背景に、自由な性関係や女性の権利の拡大などを積極的に扱っていることや、高い理想を不条理なまでに追求する禁欲的な理想主義よりも、人間の限界を認め、感情を優先させた新たな主人公の創作に取り組んでいる点から、明らかである。だが、そのような新しい取り組みにもかかわらず、Malamudが新しい時代の価値観や生き方にそれほど素直に馴染んでいなかったと思える例が、作品のそこここに見出される。

たとえば、精神分析を受けることが社会的地位を象徴する流行の一部となった時代を反映し、Kittyはフロイトを丹念に読んだり、隣人の分析医、Ondikにかかったりもする。しかし、Malamudは、彼自身が一番近い性質のDubinに、“I've lived my life without it[analysis].”(145)と、精神分析医にかかることを頑なに拒否させている。そこには、文学の端に連なる者こそ人生や人間を真に理解しているという自負や、他人に頼って問題解決を図ろうとする安易さに批判的な姿勢が、ちらほら感じられる。また、FannyとModeのどちらも、新たな生き方を模索するために60年代の落とし子のような宗教的コミュニンに加わるものの、どちらもコミュニンに救済を見出していない。そこにも、理念が先走った若者文化に対するMalamudの密かな批判が隠されている

のではないだろうか。

もっとも、かつてヒッピーのように見えたRogerに対して現在も拒否感を抱き続ける自分を、Dubinが、“The biographer did not care to be the victim of that kind of response to people. It indicated objectivity missing, a quality he could not afford to be caught short of.”(26)と自己批判する場面から、時代変化を理解しても感情的にはなかなか受け入れられないことを、ふたつの全米図書賞を取った作家としてMalamudが潔しとしていなかったことが、推察される。

しかし、Dubinは、感情的にものごとを否定するほど頑なであってはならないと自らを諫めながらも、新しい変化に十分ついて行ってはいない。その大きな原因と考えられるのは、失敗者であればもっと謙虚にならざるをえなかった場面で、Dubinが自分の道をつき進むことである。彼が後生大事に書齋に掲げる自由のメダルは、恐らくMalamudの本来の意図によれば、〈自由〉な生き方をする優れた者であることの証なのだろう。だが実際には、自由な人間として人より優れているという自負から、Dubinは妻の忠告にも、友人の忠告にも、若い青年の言葉にも耳を傾けず、現実の姿を寓話的二項対立に単純化した殻にこもって、自分の思考の枠外にある新しい時代の可能性を拒絶している。その結果、自由のメダルは非常に皮肉な意味合いを帯びてくるのだが、それにもかかわらずMalamudが、高慢さという心理的罠に陥っているDubinの欠点を十分に批判しないまま、誰もDubin以上の生き方ができないかのように描くとき、成功によってもたらされたDubinの限界は、著名作家となったMalamud自身の限界だったように思えるのである。

1976年にMalamudは*The Tenants*に関するインタビューを受け、彼の人間信頼が失われつつあるように思うがという問いに、“Yes. My faith in humanity has been bruised to some degree.”<sup>18)</sup>と答えている。初期の作品では主人公に限界を超える理想を追わせたMalamudだが、1970年代以降の作品では、限界が人間的努力をしのぐようになり、最後の完成作品となった*God's Grace* (1982)では、その傾向は決定的となる。主人公であり、第二の大洪水のただ一人の生存者であるCohnは、はじめのうちこそ人間に絶滅を引き起こした神に抗議す

るものの、新たな人類を教育する神の立場に立ったとき、新たな人類の墮落を前に彼らの全滅を願う。Cohnの絶望は、洪水を起こして現代文明を破壊し、新たな創世に望みを託さざるをえなかった神の行為の是認であり、変化するアメリカ社会に対するMalamudの深い幻滅の表明に他ならない。

結局、30年代から40年代の不況と戦争という逆風のなかで苦勞して生活の資を稼ぎ、作家になるまでに長い年月のかかったMalamudは、善良で良心的な努力家の作家として、新しい時代の、自由と平等と豊かさという明るいイメージの下に、軽々しさと行き詰まりを感じていたに違いない。だが、彼を幻滅に追い込んでゆく、まさにその道徳的資質のために、Malamudは時代遅れで狭量な作家とみなされることに甘んじられず、新しい時代に迎合した作品を模索せざるを得なかったのだろう。ただ、保身にまわった挑戦は成功するはずもなく、自由を主張しながらも道徳や倫理から完全に解放されないDubinの行動は、禁欲的生き方と情熱的生き方に代表される二項対立の枠を出ることができない。そして、ものごとの多面性が言及される場合でさえ、それがDubinの視野の広さや認識の深さを実感させることは少なく、むしろそこまで気を回さなければならない神経質で狭量な人となりを強調する。このように、DubinはMalamudが意図した以上に卑小で欠点に満ちた人間に墮しているのだが、Malamudはそれに気づかないままDubinに迷いや欠点から逃れられない人間の姿を重ね、人間とはせいぜいこんなものだと主張する。そのような主張からは、絶望的な状況の中でも高い理想に挑戦した初期の主人公の真摯な生き方が失われているだけではない。自身の硬直した思考に端を発する幻滅と諦めによって、次の時代を担い引っ張って行く新たな生き方が作り出される可能性が断たれ、70年代以降の作家としてのMalamudの限界を露呈しているのである。

## 注

- 1) Ralph Tyler, "A Talk with the Novelist." *Conversation with Bernard Malamud*, ed. Lawrence Lasher. (Jackson: University Press of Mississippi, 1991), 81.

- 2) Richard Locke, *Saturday Review*. (March 17, 1979), 68.
- 3) Sheldon J. Hershinow, *Bernard Malamud*. (New York: Frederic Ungar Publishing Co., 1980), 114-15.
- 4) Bernard Malamud, *Dubin's Lives*. (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1979), 11.  
以下、本テキストからの引用は参照頁数を引用末尾の括弧内に示すこととする。
- 5) Marc Shechner, "The Return of the Repressed." *Bernard Malamud*, ed. by Harold Bloom. (New York: Chelsea House Publishers, 1986), 183. 及び、Iska Alter, *The Good Man's Dilemma*. (New York: AMS Press Inc., 1981), 182.
- 6) Marc Shechner, "The Return of the Repressed," 180.
- 7) Jeffrey Helterman, *Understanding Bernard Malamud*. (Columbia, South Carolina: University of South Carolina Press, 1985), 98.
- 8) Marc Shechner, "The Return of the Repressed," 182.
- 9) Bernard Malamud, *The Assistant*. (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1957), 125.
- 10) Robert Towers, "A Biographical Novel." *New York Times Book Review*. (18 February, 1979), 1.
- 11) Milton Greenberg, *The GI Bill*. (New York: Lickle Publish Inc., 1997), 36.
- 12) Rita Golin, "Malamud's Dubin and the Morality of Desire." *Papers on Language and Literature* 18. (1982), 198.
- 13) Ralph Tyler, "A Talk with the Novelist," 84-5.
- 14) Thomas L. Rohner, *Enigmatic Humor in the Novels of Bernard Malamud*. (Hauppauge, N.Y.: Mark IV Press LTD., 1985), 24-25.
- 15) 岩元巖「マラマッド：芸術と生活を求めて」冬樹社 (1979)、176。
- 16) 寺澤みづほ「*Dubin's Lives*論：マラマッドの最終到達点」【和光大学人文学部紀要17号】(1982)、205。
- 17) Ruth R. Wisse, *The Schlemiel as Modern Hero*. (Chicago: The University of Chicago Press, 1971), 109.
- 18) E.H. Leelavathi Masilamoni, "Bernard Malamud--An Interview." *Conversation with Bernard Malamud*, 71.

## The Lives Bernard Malamud Lost in *Dubin's Lives*

Reiko NITTA

Even before it was published, Bernard Malamud revealed that he had been very ambitious in creating *Dubin's Lives*. This novel, however, suffers from many defects and discrepancies caused by the author's attempts to attain a new way of living more suitable to the society after the 1960s.

Malamud was fundamentally a moralist and believed in the discipline with which he attained his own success through the Depression and the World War II. As an established writer, however, he had to face the society after the 1960s, which was less restricted by genteel traditions but entertained more material affluence, sexual freedom, and sexual and racial equality. Though he does not reject all the new tendencies, Malamud was not flexible enough to accept easily the way of life of the new society. This limitation is reflected in the contradictions between the plot and characterization, the inappropriate allegorical structure to contrast moral requirements and sexual and emotional requirements, Dubin's well-off but failing heroic character and the role of the daughters, who repeat their father's defects instead of enlarging his life with their own merits as the sons in the earlier works of Malamud did.

After all, as a good conscientious novelist Malamud tried to create a new way of living with the new standards. It was because of his conscientious nature, however, that he could not learn much from the new free society so that he failed not only in maintaining his old good moral way of living but also in creating a new way.